第４回三重津海軍所跡ガイダンス施設基本計画策定委員会　議事録

１．**日時**：平成 29 年 8 月 31 日（木）　9：30～11：50

２．**場所**：佐野常民記念館　1 階多目的室

３．**出席者**：

・委員 7 名　【有馬委員、江口委員、里浦委員、富田委員、中村委員、本多委員、渡辺委員】

・助言者 2 名　【内閣官房産業遺産の世界遺産登録推進室（本中参事官、橋本行政実務研修員）】
※欠席：文化庁文化財部記念物課　五島文化財調査官

・関係機関 3 名　【佐賀県肥前さが幕末維新博事務局（山口推進監）
佐賀県教育庁文化財課（渋谷係長）
日本赤十字社佐賀県支部（船津事務局長）】

・庁内関係課 7 名　【佐賀市経済部観光振興課（古賀課長）
佐賀市建設部建築住宅課（樋渡課長、中川主任）
佐賀市教育委員会社会教育課（豊田副課長、吉田主任、諸田館長）
佐賀市教育委員会文化振興課（谷澤係長）】

・事務局 7 名　【佐賀市企画調整部（古賀部長）
三重津世界遺産課（木島課長、前田副課長、岩瀬係長、伊藤主事、船津主事、古賀主事）】

４．**あいさつ**：

●市企画調整部長

本日はお忙しいなかお集まりいただきありがとうございます。会長、副会長、内閣官房におかれては、昨日の策定委員会にもご出席いただき、お疲れのところ申し訳ないが、本日もよろしくお願いします。先日、日本赤十字社の東京本社に伺って、このガイダンス施設の増築と展示内容の見直しの説明とお願いに行ってきた。事前に県支部の事務局長から情報提供をしていただいていたので、スムーズに説明と意見交換ができた。我々としては何か条件を頂くのかと思っていたが、そういったことも特になく、お互いに顕彰しあって相乗効果が生まれたらいいですね、情報共有をしてお互いがアンテナ的な情報発信をしていきましょうと言っていただいた。また、内閣官房、文化庁においては、なんとかガイダンス施設整備と史跡整備に補助が活用できるようにご指導やご助言を頂いているところ。こういったことを考えるとこの事業全体が多くのご支援によって進んでいるなということを感じている。是非しっかりした計画を作っていきたいと思っている。本日もよろしくお願いします。

●会長

４回目ということで今日基本的なことを決めていきたい。本体計画については昨日追加でもう 1 回委員会を開催した。スケジュール的にタイトであったこともあるし、三重津海軍所跡ではガイダンスと史跡の現場との一体的活用が大事だが前例が少ない。理念的にはそういう関連性というのが一体の

ものであるということは言われるが、三重津のように実際に立地的に一体化してやっているという実例は、そう多くはない。加えて、できれば文化庁の補助事業で実現したいということもあり、色々な要素があるので、内容を固めていくのはなかなか大変だが、これまでの議論で内容がクリアになってきたところでもある。本日もよろしくお願いします。

５．議事：

（１）第３回委員会での指摘事項と対応方針について

説明

・資料 3-1（前回員会での主な指摘事項）、3-2（第１回委員会の議事録）の説明

質疑応答

会長　　前回のご意見に対する事務局の考え方をお示しいただいている。基本的に重要なことは反映して頂いていると思うので、計画案の中でご議論を頂ければと思う。

※ご意見なし

（２）三重津海軍所跡ガイダンス施設基本計画（案）について

説明

・資料 4（基本計画案）の１～３章まで説明

質疑応答

委員　　P12、P9 の図とも関わると思うが、以前の資料では、屋内展示と屋外展示のところに矢印があった。P9 では矢印が双方に向いていて、P12 も同じような一体展示を大きくしたところだと思うが、デジタル技術、体感のしかけというのはあくまでも方法。矢印が目指す意味を考えた時、以前もらった資料の P12 図 5、同じなのだが“現場で感じる”、“知識を深める”のこの矢印はそれぞれを体感して、体験的理解、知的理解と解釈していたが、その言葉がなくなっている。あくまでも方法論と矢印が目指す意味、何を目指すのかをきちんと明記した方がよいのでは。

事務局　　P12 の図の外枠の矢印は屋内と屋外を相互に循環するように見学し、理解を深めてほしいという意味の矢印のつもりだったが、図の配置によって分かりにくかったりすると思うので、再調整したい。P9 の全体の概念図のほうは、昨日の委員会でもご意見を頂いたりしているので、こちらに関しても再調整をしたいと思う。ただ、中に記載しているデジタル技術、ガイド、体感のしかけなどは手段の話だが、これは屋内屋外に関わらず両方でやれること、双方をつなぐものというのを示したかったので、真ん中に記載している。
もう少し分かりやすくなるように、上位計画と併せて整理したい。

委員　　P9 図の中に“理解”という言葉が無くなっている。文中にはたくさん“理解”という言葉が出てくるが、図の中では真ん中に“様々な手法”“活用”“見えない三重津が

見えてくる”と書かれているが、“理解”というのがまず必要。P12 を含めて、循環するのは分かるがそこには必ず理解がないとより深まっていかないのでは。

事務局　補足だが、図 5、デジタル技術と矢印の方向が連動しているわけではなく、下の矢印についても体感のしかけに連動しているわけではない。矢印は巡回しながら理解を深めていくというのを示しているのもので、ではどうやって理解を深めていくのかというと、デジタル技術とガイドと体感のしかけなどを使っていきますというのを表現している。配置の仕方を工夫させていただいて再度提示したい。

会長　P9 の図で真ん中に様々な手法（デジタル・アナログ）と書いているものを実際どのようにやるかという話。もう少し上と下を真ん中に寄せればよいと思うのだが、今は、寄せると重なるので上下に分けているのだと思うが、それは技術的な話で直せる。

先ほど少し説明があったが、昨日の委員会で P9 の図に前段の説明に入っているキーワードが記載されていないというご指摘があったので、この図は修正が入る可能性がある。

委員　図 5 の体感のしかけの括弧の中に“五感”という言葉があるがこれが気になる。

後半にも“五感”という言葉が出てくるが、“五感”の中には一般的に味覚と嗅覚が入る。この 2 つが“五感”の中に入るので誤解を招くことにならないか。

会長　もう少しゆるく言っていると思うが、障がいがある人のことを考えると違う言い方をした方が良いかもしれない。

事務局　イメージとしては、人が色々な方法で感じることの総称という意味合いで使っている。特に、嗅覚と味覚が何を指すのかという具体的な議論になると、嗅覚は外に出た時に風や匂いを感じるということで説明はつくと思うし、味覚はこじつけだと周辺の食べ物で記憶を留めていただくという事で説明できないか。ただ、先ほど会長が言われた部分もあるので、“五感”についてはもう少し整理したい。

会長　概念的には良いと思う。あらゆる感覚を使って感じてもらうという事を強く前面に出すということは非常に良いと思う。

説明

・資料 4（基本計画案）の 4～6 章まで説明

質疑応答

会長　4 章から 6 章については、少し書き換えられている部分がある。

中身が根本的に変わっているわけではないが、構成上の整理でそうなっているので、少し丁寧にご意見を伺いたいと思う。

委員　何点か言葉の問題について。P40、2 段落 3 行目“キャッチフレーズ”という言葉があるが、この言葉は商業用語なので基本コンセプトなどが適当では。キャッチフレーズというのは、お客さんをキャッチするための言葉なので、コンセプトが良いと思う。

P41 の 4.2(1)について、個人的な好みもあると思うが、“人にやさしいガイダンス施

設”というのは、何かを言っているようで、実は何にも言っていない気がする。あえて人にやさしいという言葉を使う必要はないのでは。「スムーズな見学・誘導や案内を提供できる、誰もが利用しやすいガイダンス施設」くらいの表現で良いのでは。

質問だが、P47(5)4 行目、“ガイドマニュアルとの連動を図る”はどういう意味か。

事務局　1 点目の基本コンセプトの件は改めたい。

2 点目の“人にやさしいガイダンス施設”については、誰でも利用しやすい施設づくりを目指してほしいという意味で、委員からもご意見をいただいていたので、こういう使い方をしている。ただ、委員が言われたのも、そういったことを目指してやっていくということを、きちんと書いてほしいということだと思うので、きちんと伝わる様にもう一度確認したい。

最後の“ガイドマニュアルとの連動”については展示内容等を、最初に整備した時はもちろんだが、例えば、後から発掘調査の成果が出て、新たに展示内容を更新した時に、それがガイドにもきちんと伝わるようにガイドマニュアルも更新していくという意味。ガイド活動と展示内容がわかりやすく解説できるようにマニュアルとも連動させていきたいという意味で書いている。内容が伝わる様に表現を再考したい。

委員　三重津の場合は、今後新しい情報がどんどん蓄積されていくと思う。そのため、ガイドマニュアルも更新していかなければいけない。更新などに合わせてガイドの研修なども連動させていくという意味合いだと思う。それが分かるように文言の検討をお願いしたい。

会長　ご指摘のあった、誰もが利用しやすい施設づくりの部分は、あまりふわっとした言い方をしないほうがいい。全部が入ってくるようで、実質何も言っていないのと同じになる。そのあたりはきちんとこういうことを目指しますということが伝達されるように。どうでもいいことかもしれないが、P41(1)の書き出し部分で“ガイダンス施設の利用者は”の次に、最初に“子ども”がきているのは意識的にこうしているのか。

事務局　子どもにも分かりやすく伝えていきたいという意味で、最初に子どもがきている。

会長　要するに大人も子どももということ。

委員　P42、“記念館には世界遺産･･･3 つの展示をすることとなる”という追記があったが、3 つを一つ一つと考えた時にそれぞれの良さがあるのではないか。

少しうがった見方をしているのかもしれないが、P34 の表では新設が最初からダメだ、という書き方になっていないか。新設の中にも良さがあると思うのは 3 番目。「独立した施設を作ることによってより専門的な施設展示ができる、しかしその場合は動線を考える必要がある」というような書き方をして〇を付けてもいいのではないか。新設をした場合、全てが△になっているので、それは作為的な感じがする。最初から全てが否定に入っているのではないかという見方をしてしまう。「③記念館との関連性」となっているので、施設の関連性という言葉に直していければ、記念館と施設、記念館と記念館の中にある施設、一体型、新設と考えてもいいのではないか。

事務局　新設を最初から否定しているつもりはなかったが、表で見るとそう見えるというご意見だろうと思う。前回、委員からも展示の充実を図るならどちらがいいという項目を設けたらどうかというご意見を頂いたが、どちらの状態であっても、きちんと展示は充実させていきたいと考えているので、あえて項目は設けなかった。記念館との関係性と書いているのは、施設という書き方をすると、他に関連する施設が出てくるのではないかというのがあって、記念館との関係性とさせてもらっている。関連があるものだから相乗効果を高める方向に持っていきたいので、施設を特定して書かせてもらった。

事務局　1 つは既に記念館が現存しているので、新たに作る場合は別の場所になる。そういう意味ではロケーションや一体展示の考え方を踏まえると、アクセスがしにくくなるという部分と、幕末近代化の精煉方にスポットを当てた時には佐野常民の存在は非常に大きいので、それを上手く連動させるためには記念館とガイダンスをつなぐ必要が出てくる。それを考えると③の評価は△くらいかなと思う。〇であっても特に問題ないとは思うが、記念館の活用の方が◎になるとは思う。この辺りはもう少し検討させていただきたい。

会長　単純に量的な展示内容の充実であれば、新設でスペースが多い方が良いというのはあると思う。そういったことも考慮したという事で入れていてもいいのではないか。どういった考え方をしても、最終的に一体展示、一体活用を考えると、ロケーションを含めてその強みは既存施設の再活用が圧倒的に大きい。また、最初から考えていた要素ではないが、一体活用は文化庁の補助をもらう上で重要。相対的に考えてということの方が説得力があるので、考慮した要素として付け加えても良いと思う。

委員　併用に有利な項目ばかりを書いているので、恣意的な印象を受けるのではないか。
併用と新設にはメリット、デメリットがそれぞれあるので、新設ならではのメリットも書いておきつつ、その中で検討してこちらにしましたという書き方をしておく方が、すんなりいくのではないか。

事務局　新設した場合は、課題に挙げている展示環境の改善、スペースの確保については評価が高くなるはず。新たに項目を入れるような整理をしてみる。

委員　展示施設なので、展示に重きを置くのは当然だが、特に子どもなどがずっと見ていって、情報を仕入れてとなったあと、それをどう活かしていくのか。どうやって自分たちが次の時代を創っていくのか。というようなイメージができるようなことがあればいいと思う。例えば P18 を見ると現状の佐野記念公園のコンセプトには最初に次世代教育が書いてある。そういった項目が今回の計画にあるか。P45 の機会の創出のところに多目的室やイベント室などはあるが、具体的にこれについて言及しているところはなさそう。例えば、最近は展示会や展覧会があったとしても最後はお土産屋さんのようになっているが、そうではなく、見てきた人がアウトプットできるものがあるといいと思う。近代化された当時は、当然当時の最先端技術を自ら海外に行って獲得し

て努力して開発してきたというのがあるので、今の時代の最先端の技術、VR や MR などの仕組みを簡単に分かりやすく解説したり、3D プリンタのように実物を自分たちでデジタル技術を活用して作っていくというような。今の時代の最先端技術はどういうものか。3D プリンタも安いもので構わないので、そこで自分たちで作ってみる。ドライドックの 3D データを活用して、ミニチュアドライドックを自分たちで出力してみる、VR を簡単に作れるキットもあるのでそれを作ってみるなど、新しい技術を子どもたちに体験してもらって、次はどういうふうに自分たちが次世代の社会を作っていくのか考えるイメージのようなものが書けないか。

会長　面白い提案だと思う。具体的に何をやるかはきちんと考える必要があるが、来た人がアウトプットする機会をつくるというのは非常に大切なこと。個人的な感覚からいくと潜在的な欲求はあると思う。以前フィンランドデザイン展というのをやったことがあるが、その時に最後のところに塗り絵コーナーを設けた。デザインの中に馬の形の椅子があったので、その塗り絵で、好きに塗ったあとに壁に貼っていくという事を行ったが、あっという間に一杯になって 2 回くらい貼るための壁を増やさなくてはならなくなった。そんなに人気になるとは想像もしなかったが、やはり展示を見て受け取るだけではなく、それを踏まえてアクションするということに対しての潜在的な欲求はかなりあると思う。ただし、我々がそれを引き出す手法を持っていないので、実際のイベントとして成立していないが、委員が言われたように、3D プリンタを使って出力してみるとか、そういうことができればかなり面白い。そこまで具体的なことは書けないだろうと思うが、そういう場や機会を設けるという事はどこかに書いてもよいかと思う。

事務局　次世代教育については、機会の創出というところでも、現地学習とつながるような教材の開発なども行いながら学習と連動していきたいというようなことも、機能のあたりに書いている。ただストレートに次世代教育というキーワードは出していないが、もともと記念館が持っている機能については継続して行いたいと思っているので、それがわかるように調整して追記したい。

体験については、7 章の中で実際展示をしただけで、来訪者にずっと来てもらえるわけではないと思うので、色々な仕掛けをしながらやっていくということを書いている。ストレートに 3D プリンタを置きますとまでは書けないが、その中で今言われたことも想定した書きぶりにしたい。

委員　3 点、確認と質問をしたい。

1 つ目は、6 章の展示計画だが、6.2 が展示テーマ、6.3 が展示ストーリー、6.4 が展示構成になっているが、これは今後基本設計に落とし込んでいくときに展示シナリオのような形で発展していくものかなと考えている。もし、その縛りがあるのであれば、文章ではうまく整理がついているが、実際に展示を造っていく過程で、例えば“学ばないと分からないもの”の中に、三重津のフル・ヒストリー、三重津海軍所稼働期の

説明がある、“失われたもの”の産業活動の中に造船・修船の説明がある、“地下に埋没しているもの”の中にドライドックの説明がある、というように、重複する説明すべき対象がわかれて出てくるので、これをそのままシナリオに落とし込んでいって展示の動線を作るのは難しいのでは。イメージパースを見た時もそう思った。

2 点目は、佐野常民の展示室の扱い。現在 2 階にある佐野常民記念館の展示室の部分は、もちろん施設の中で一体として展示を構成していくというのはわかるが、例えば P46 の(1)の最後の部分に“なお、ガイダンス施設の整備に伴い、～整備することとする”と書いてあるが、この対象に佐野常民の展示も入るのか。入るのであれば設計や展示、工事費にも直接関係する問題になる。その点をどう考えているのか。

3 点目は、P49(2)に“人々の～『凌風丸』”という表現があるが、この部分だけ抒情的。何か思い入れがあるのか、実際にどうなのかはわからない。他の部分は比較的淡々と描いているので、違和感がある。日本初の実用蒸気船の説明はしっかりすると思うが、特に「実用」の部分はしっかり説明すべき部分。

事務局　1 点目のテーマ、ストーリーの構成についてだが、いま項目を起こしているが、重複している部分など設計の段階で調整が必要なのではないかというご意見をいただいた。まさに言われた通りだとおもっている。実際、三重津の場合は、文化庁と協議をしている中で来年度、屋内と屋外を一緒に設計するという方向で調整している。一体展示なので、解説する内容も含めて屋内でやること、屋外でやることをきちんと整理しなければならない。屋外で解説する内容も含めて重複する可能性も十分ある。設計段階で変わる可能性があることを中に記述として残しておくようにしたい。

2 点目の佐野常民の展示室についてだが、現在教育委員会とも協議をしている中で、つなぎの展示を作っていくと、2 階部分とかなり重複した部分が出てくる。また 1 階の展示室に変えることで、現在 1 階に日本赤十字社の活動を紹介するコーナーがあるが、それも上階に移動させる予定にしているので、その辺りも含めて全体的に再度構成を考える必要があるだろうということで教育委員会とも話をしている。文化庁の補助事業の対象ではないが、一緒に展示の在り方を考えていくという点では相互で確認が取れている。

3 点目の凌風丸の表現については、言われる通りだと思う。ただ、凌風丸に関してはパブリックコメント等でも復元を望む声が多い。それを表現したくてこのような書き方になっているが、確かに浮いている感じはするので表現は調整したい。

事務局　1 点目に対する補足。展示のテーマ、ストーリー、展示構成については、この段階では大枠の示し方という理解をしてもらいたい。文化庁との協議の中でも、これだけで展示を考えるのは非常に難しいため、展示の計画はもう少し詳細なものを作った方が良いと言われている。基本設計は来年始めようと思っているので、基本設計の中で合わせて展示の詳細計画を練り直すということにしている。その考え方については、P58

で少し説明をしている。

会長　6.3の内容は展示ストーリーを構築するための基本的な要素というニュアンス。ただ、展示ストーリーというタイトルになっているので、ここからストーリーが立ち上がるというように読まれる可能性はあると思う。頭の部分で一言断っておくなどの配慮が必要なのかもしれない。

委員　先程の委員のご意見と関連すると思うが、今回いただいた資料をみると、佐野常民の内容を強調している部分があったと思う。P52のフロア図、料金所は1階入り口と2階の入り口の2か所あるのか。また料金は別々になるのか。

事務局　料金の徴収については、今後具体的に詰めていくが、バラバラに徴収するのは難しいと思っている。券売機のようなものの設置は、今のところ1階をイメージしている。徴収に関しては、料金の設定をする中でどういう区分にするのかの詳細を詰める。

委員　施設の名称は、三重津ガイダンス施設と佐野常民記念館の２つになるのではなく、合わせて１つの施設名称になるのか。

事務局　非常に難しい話。施設の名前をどうしていくのかは、非常に重要な部分になる。佐野常民記念館はずっと地域にとっても関係者にとっても大切にされてきた場所なので、その名前がなくなるというのはどうなのかという意見もある。名称については今後時間をかけて教育委員会とも検討したい。

委員　委員からのご質問の展示構成や展示ストーリーの問題で、今後さらに検討を加えていくという回答だったが、最初に会長が言われたように、この場合屋内展示と屋外展示とデジタル展示、この3つを連動させながら一体化して展示コンセプト、あるいは展示計画を作成しなければならない。このガイダンスの委員会は屋内展示に特化したようなところがあるので、その屋内展示をどうしていくのか、デジタル展示をどうするのかを、この計画書に出てこないかもしれないが、それを含めて屋内展示を考えないと、ツギハギになる可能性がある。屋内、屋外、デジタルという3つの展示方法の、全体的な内容に見通しをつけて取り組まなければ2度手間、3度手間になる懸念がある。

事務局　当初、ガイダンス施設の計画を立ち上げようとしたときには、まずはガイダンスを先に造ろうとして進めており、一体展示の考え方は検討途中から出てきた。かといって本体計画には一体展示でやるということにしている。作業を進めていく中で、来年度から基本設計をやりたいということにしているので、基本設計を考える際にも、検討できる組織体制を持ちながら、その中で設計をしつつ、議論をしつつという体制をとっておく必要があると内部では考えている。そうなった場合には、委員の皆さんにもご協力をお願いしたい。

会長　これからの展示は何でもそうだが、ここの場合は特に、従来型のまず中身があってそれをどう表現するかではなく最初からデザインと中身は一体化している、あるいはどういったデジタル技術を使うかというのが中身に反映してくる。逆にそっちから既定

される面も出てくると思う。そういった点も考えると、展示を考える際に全体のオーガナイズはかなり大変。ここで中身が決まってくる。

委員からご指摘のあったチケットの話は重要だと思う。おそらく来た人は全部見るだろうと思うが、部分的に三重津だけ見るということもあるかもしれない。客の動向についてデータをとることも必要になってくると思うが、チケットを上手につくってあると、もぎりでデータがとりやすくなる。きちんと神経を使ってデータをとる必要がある。例えば外国からのお客さんをどう判断するかなど。目視というのもあるが、中国・韓国・日本は目視で大丈夫か。どういうお客さんがきているかは、今後色々なところで聞かれるようになると思うので、そのデータをどうやってとるかは、めんどくさいと思うが考えておく必要がある。

委員　三重津に来る人は歴史ファンの人だけではなく、世界遺産のブランドは強いので観光を主としてくる人がたくさんいると思う。その場合、ドライドックの印象をもってくると思う。個人的には外に原寸大の模型を作った方がいいのかなとは思うが、色々な制約があって難しいというのは分かったので、その中でポイントになるのはイメージパースの中にある原寸大模型の部分。この部分は来た人たちの欲求を満たしたり、イメージに残る部分だと思うのでドライドックの作りこみは大事。P52 の見取り図をみると、多目的室とほぼ同じ大きさの展示室ということになっている。これとイメージパースの時の絵の広がりとかなり差があるように思う。この辺りは設計でまた違ってくるとは思うが。ここでいかにダイナミックな感じで印象をつけるのかというところもあるので、その辺りを気にかけてやっていただければと思う。

会長　言われる通りで、まず最初にここを見ていただいてどれだけ強いインパクトを残せるかというのが、かなり決定的になってくると思う。その部分にはお金もかけていいと思う。少し江戸博に似ている。江戸博も展示室に入った瞬間が勝負のようなところがあるので、それに近いかなという感じがする。

説明

・資料 4（基本計画案）の 7～8 章まで説明

質疑応答

委員　7 章、8 章については、今後詳細を検討される前提で、強い要望として、P57(2)②の学芸担当の職務の内容については「資料の調査・研究と管理」にしてもらいたい。これだけを読むと学芸担当とは思えない。調査・研究、できれば収集という問題もあると思うが、学芸担当である以上、資料に対する調査・研究を最大の任務として入れておいていただきたい。

事務局　現在、調査研究に関しては教育委員会で実施している。施設の運営自体もどういう形でやるかまだ定まっていないが、運営と調査研究の所管がどのように連動できるかは、今後の

検討課題ということにさせていただきたい。これについては持ち帰らせていただいて、どこまで書きこめるかを確認したい。

委員　展示の更新や企画展の実施を行うのが、調査・研究を行わない学芸員にできるのか。それとも調査・研究を教育委員会がやって、展示の更新や企画の展示をそっちに任せてしまうのか。それは学芸担当とは呼べないのでは。ガイダンス施設として、あるいは博物館的な機能も併せ持つのだとすれば、きちんとした学芸員、調査・研究能力やそういう職務を持った人を配置するというのが大事だと思う。

事務局　現在、佐賀市には学芸員がいない。今回学芸員としての役割をきちんと設置するとなると、ここが初めてになる。渡辺委員が言われたことも含めて受け取らせていただいて、今後佐賀市としてどういうように学芸員を配置・育成していくか、全体の大きな話になるので検討させていただきたい。

会長　世界遺産のガイダンス施設であり、三重津の場合は特殊な困難さも含んでいるので、ここにそういう人がいないと展示の更新はできないと思う。難しいとは思うがどこも無理してやっている。記憶遺産に認定された田川市などは、財政は厳しいはずだが、保存担当の学芸専任職を１人入れている。これはやらないと仕方のないことだと個人的には思うので、ぜひ頑張って頂きたい。

委員　言葉の付け加え。P56(2)“そして、来訪者が･･･運営を行う。”とあるが、個人が来るリピーターではなく、その人が人に伝えていく、広めていく必要があると思う。そうでなければ増えない。そのため「人に話したくなる」「また行きたい」、“また来たい”ではなく「行きたい」と思ってもらえるような施設にしていく、そういう言葉が必要だと思う。

事務局　言われたような内容に修正する。

委員　8 章、整備スケジュール。来年度に基本設計をすすめるという事だが、P17 の事業実施計画の表をみると駐車場については来年度に工事にとりかかるという表現になっていると思う。今年度に用地買収と実施設計が終わって、来年度施工だと思うが、駐車場は規模や場所は決まったものがあるのか。

事務局　駐車場についてはスケジュールにあるように、今年度用地取得に向けて予算取得している。場所については、これから交渉に入る段階なので、具体的な位置は控えさせて頂きたいと思うが、記念館の北側の土地を現在調整している。お土産屋さんよりも北側で、そこに車を停めて歩いてきてもらうことを想定している。規模は現在河川敷の駐車場が約 60 台、記念館が約 30 台停められるようになっているが、増築になった場合、駐車場スペースをつぶしてしまうことになるので、現在の駐車台数程度は確保できるように広さを確保している。

委員　P56(4)の「多様な主体の参画」について、市民が主体的にという事だと思うが、主体として参画、運営を行うと書いているが、運営に関しては運営形態及び組織で分かるが、そことの関連性はどうなるか。主体的に関わるならわかるのだが、多様な主体が

どのように関わるのかがきちんと書けていない。具体的にどういう判断をしたらよいのか。

事務局　館の運営をしていくにあたって、行政だけでは運営できないので、様々な方々と協力し合いながら効果的な運営をしていきたいということを書いているつもり。文脈が分かりにくい点もあるので、表現を改めたい。

委員　整備スケジュール。先ほど基本設計については外と館内を一緒にやるというようなことを言っていたが、ガイダンス施設内の展示の基本設計という形ではなく、全体で進めていくという感じで理解してよいか。今回、本体があって、ここの計画があって、同時並行で進んでいたので厳しいものがあったが、一体でするのならそれはそれでいいと思う。

会長　通常想定されるスケジュールとはかなり違う形で、同時並行でやっているので、特にガイダンスの委員会ではかなりタイトなスケジュールの中でお考えいただくことになった。

今回いただいたご意見により、若干の修正が必要になると思うが、今後の修正は会長と副会長、事務局でやっていくということでご一任いただければと思う。

〈一同うなづく〉

会長　議事はこれで終了になるが、最後にこれだけはというのがあればお願いしたい。

委員　計画書の中に図が随時入ってくるが、どの図を見ればよいのか注記の中に入っていないのでわかりにくい。１頁に対して１つの図であれば分かるのだが、例えばP35のように関連法令が並んでいるときに、左の図はどれに対応していて、右の図はどれに対応しているのかが、P36の図もどの範囲を見たらいいのかというような注記がどの場面にも無いので、不親切だと思う。改善して欲しい。

もう１点、気になる言葉。P50、“三重津海軍所の･･･展望させる。”とあるが、“展望させる”という表現に違和感。これまでは全て“理解する”“展示解説する”などの表現なのに、この部分だけは絶対見なさいよという感じで“させる”になっているので、“する”でもいいのではないか。

会長　全体を同じ視点で表現を見直す。かなり気を使って書いているのはわかるが、文章なので、どうしてもその場の文脈でいろいろなことがあると思う。見直して頂きたい。図との対照性についても、やっている側にとっては重要な事。つい落ちてしまうこともあると思うが、気を付けてやっていただきたい。

他に何かご意見はあるか。前回の繰り返しでも構わないので、ここだけは是非にという事があれば言っておいていただきたい。

委員　副会長の学芸担当のご意見と同じようなことだが、学芸の調査研究を伴う職員をここに配置してもらうということ。身分として今佐賀市には学芸員はいないという事だが、佐賀市歴史民俗館も大隈記念館も佐野常民記念館も嘱託さんなので、職員としての学芸員という形で、直営にしても指定管理にしても配置してもらえれば。情報は館

に蓄積されて引継されていきやすい部分と、職員の頭脳に残る部分とがある。人柄も含めて、全てを誰が見ても分かる形で文章に残して引き継ぐというのは、難しい面も多いと思う。今までの佐賀市は嘱託の学芸員が多いと思うが、常勤の職員として配置するということを今後は考えていただきたい。私も佐賀市内で学芸員をやらせてもらっているが、人が変わるとつながりが１度消える。それが５年や延長しても数年で変わってしまうので、今まで築いてきたものが一度リセットされてしまう。地域の同じ業界とのつながりという面でも、職員としての配置を考えて欲しい。

会長　委員会で非常に強い要望があったことを伝えて欲しい。計画書に書くわけにもいかないので、極めて強い要望があったということを伝えてほしい。世界遺産だから偉いというわけではないが、条約に基づいたものであり、こちらからすれば観光資源にしたいということもあるが、基本は重要な遺産になるから世界的に守りましょうというのが世界遺産条約の基本的な主旨。そこに専任の職員がいないというのは、ある意味少し恥ずかしいことだと思う。

事務局　人事担当部長に要望としてしっかり伝える。佐賀市の特に専門的な施設においては、専門的な知識を持っている職員を、今のところ嘱託で雇うということが多いが、最低限、ご意見を頂いたような雇用のやり方で学芸員といった知識を持った人を雇えるように要望を出したいと思う。

委員　P23-31。“三重津タイムクルーズ”、“みえつ SCOPE”という単語が出てくるが、三重津が漢字だったり平仮名だったり、スコープがカタカナだったり英語だったりする。統一を。

会長　全体として再度見直して修正をお願いしたい。“みえつ SCOPE”は個別のコンテンツ名としてひらがなにしているとか、そういった理由があるのか。

事務局　“みえつ SCOPE”は固有名詞。

委員　では仕方がない。ドームシアターもそうなのか。ｐ23。

事務局　確認する。

会長　全体の会議としては非常に短い期間の中で、過密なスケジュールをお願いして、申し訳なかったと思っている。本日も貴重なご意見をいただくことができた。最終的には副会長と事務局と相談しながら取りまとめさせて頂きたいと思う。ありがとうございました。最後に本中参事官よりコメントをお願いしたい。

内閣官房　これは文化庁が中心になる事業なので、私たちは、お金は出さないけれど口だけは出す、というスタンスはこれまでもこれからも変わらないようにやっていきたいと思う。先生方のご意見を聴いて非常に参考になった。ありがとうございました。

１点だけ、気になっていたことがあるのでお願いしたいのだが、本体の史跡指定地の中及び世界遺産の緩衝地帯も含めた計画がある。その計画と今回のガイダンス施設、屋内展示のための施設の整備計画の関係を、随所に書かれてはいるが、例えば、第１章 P1 の一番最後にも簡単に触れられているが、関係をもう少しきちんと明示して整

理してほしい。本体の計画のどこにどういう書き方をしていて、それが今回この計画のどういう形に項目的に位置づけて整理しているのかということを、端的でいいので整理してもらいたい。

私も言おうかどうしようか考えていた部分がもう１点あって、今事務局預かりになっている P9 の図 4。これは本体の計画でも昨日の会議で提示がされて、それに基づく形で今回の計画の中にも提示されているが、この図が正確かどうかということはもう一度よく議論してほしい。保存・整備・活用というのは今回の本体計画の策定委員会の名称でもあるので、この 3 つのワードは外せないと思うが、保存があり、整備があり、活用がありというこの矢印が適切なのか、ということは現在の文化財保護の考え方に本当に合っているかどうかということも含めてもう一度考えて欲しい。保存があって、どういうハード整備があって、そこをどういう風に公開活用していくのか。だから最後に三重津が見えてくるという図式はとても分かりやすいので、分かりやすいから安心だと思ってしまうが本当にそうなのか。私の考えでは保存と活用が横に並んでいて、それが一体のものだという理解。まず保存があって、活用があって、その間にハード整備があるという整理でもないだろうという気もしている。すーっと入ってくるという観点からいうと、これでもいいのかなという気もするが、他方で、本当にこれでいいのかなという問いかけは、残されたわずかな時間ではあるが事務局で考えていただきたいと思う。昨日の会議ではそういう観点での指摘ではなかったが、ここにはいくつか整理の要素があるのではないかという意見もあったので、そこも含めて考え直して頂けないかと思う。屋外展示そのものは史跡指定地の環境整備全体を含んでいる用語として考えていいか。今回は先ほどの会長の話にもあったように、屋内展示と屋外展示が一体として連動することに意味があるという考え方が、途中で出てきた。それはそれで我々の頭の中にはすっと入って、両方一体として進めていくことが、今回三重津海軍所跡の整備を進めていく上で、リーディング部隊としての役割を果たすのだという強い思いを皆で確認してきたと思うが、展示だけで本当に整備が語れるのか。屋内展示に対応する言葉として屋外展示という用語は史跡整備全体を指しているのかどうなのか。そこを分かりやすく補足的に説明しておく必要もあるかと思う。複雑な事柄を端的に説明しようとすると、骨だけ示した方が分かりやすくなるということは事実だが、それによって本来の捉え方から少し外れてしまっているようなことはないか最後まで問いかけていってほしい。

会長　なかなか微妙なところを含んでいるというか、途中から出てきたというのは文化庁の補助金の問題と関連しているので、展示施設整備と史跡整備がイコールなのか、少しずれるところがあるのかは、そこに関わってくる話だと思う。その分を詰めていく必要があるかと思う。

事務局　本日いただいたご意見は、事務局で整理をさせていただいて会長、副会長に最終確認をお願いしたいと思う。ご協力をお願いします。

●あいさつ（市企画調整部長）

本日はお疲れさまでした。会長からお話があったように、この委員会は４月末に立ち上げて、約４ヶ月間でこのガイダンス施設の計画案をまとめていただいた。本体計画と同時に策定ということで、相互に干渉しあって、非常に難しい審議になったと思っている。改めてお礼を申し上げたい。我々はこれからガイダンス施設も含めて基本設計、実施設計、工事と取組んでいくことになる。ただ創ることが目的となってはいけないと思っている。本来の目的は佐野常民を含めた三重津海軍所跡の継承と、明治日本の産業革命遺産の価値を多くの人に知ってもらい、また記憶に留めてもらうというのが本来の目的ではないかと思っているので、まだまだ先は長いと感じている。会議の中で副会長が“墓穴を掘った”と言われたが、そういう意味でも、皆様には今後とも是非お付き合いを願いたいというように思っている。最後になりますが、皆様の今後のご活躍とご健勝を祈念申し上げてお礼のご挨拶とさせていただく。本日は本当にありがとうございました。

６．閉会